

文献番号：50

論文名：特集「よい子」が問題—ケース研究 なぜ、あの子が—思春期に「よい子」が起
こす問題行動 どうして「よい子」がキレルのか

執筆者名：新福 知子

出典：児童心理

刊行年：1999

巻：頁：53(17):1687-1691

Keyword：キレル／CPIプログラム

「よい子」がキレルというメカニズムを、アメリカのCPIに応じて段階的に分類し、分析を試みた。また、親や教師が「よい子」がキレたときに効果的に対応できるよう、具体的・効果的な対応法や、キレル状況を起こさせないような予防法について述べた。

CPIによれば、「キレル」ということは危機的状況に応じて「キレル前」「キレそうなとき」「キレたとき」「キレた後」と四段階に分類され、それぞれの段階において実証的に効果が示されている予防法・対応法があるという。それによれば「キレル前」には、共感的な「サポート」を行うことが望ましいという。この「サポート」は、「子どもとの距離」「ボディランゲージ」「声の出し方」に注意すればより効果的になるという。これは子どもがキレルことを予防する。また、「キレそうなとき」には、子どもの問題行動を端的に示し、その行為をやめた場合とやめなかった場合の結果を提示し制限を設ける、「指示」という方法が望ましいという。これは、現実的で実行可能なものでなければならない。さらに、「キレたとき」には言葉のみの制止では不可能となる。最大のポイントは、子どもも介入側も怪我をしないで事態を収束させることである。そして「キレた後」にも、セラピー的な関わりが必要であることを述べている。これによって再発の予防ができるという。

最後に、子どもを大きな気持ちで見守る親や教師がいれば、子どもが「いい子」でいる必要がなくなる、ということが述べられた。

評価 (Poor) 1 ・ ② ・ 3 ・ 4 ・ 5 (Excellent)

文献番号：51

論文名：アメリカで学んだスクールカウンセリングの内容

第2回 スクールカウンセリングプログラムの全体像

執筆者名：新福 知子

出典：月刊学校教育相談

刊行年：1999

巻：頁：13(6):108-113

Keyword：スクールカウンセリングプログラム／ガイダンス／ニーズ調査および評価

アメリカにおいてスクールカウンセリングプログラムが発展した背景や、スクールカウンセリングプログラムの概念、大学院専門コースでのスクールカウンセリングプログラム作成の課題、スクールカウンセリングの各項目についての解説がなされた。

スクールカウンセリングプログラムの起源は、1988年にアメリカスクールカウンセリング教会（ASCA）が声明文を発表したとみろから始まり、1997年に全米レベルでのナショナルスタンダード（全国規準）が発表され、1998年にはインプリメンティング・ナショナルスタンダード（全国規準実施法）が発表され、全米各地間の地域差がなくなっていくことが述べられている。

スクールカウンセリングプログラムは、スクールカウンセリングの目的や目標、役割、業務計画、作業手順、査定と評価、その他の情報から構成されており、カウンセラーの仕事を明確化するものである。これを実施することがスクールカウンセラーの仕事であるとも言える。これは、（1）児童生徒を対象とした個別またはグループカウンセリング、（2）児童生徒を対象としたガイダンス（心の教育授業）、（3）教職員・保護者を対象としたコンサルテーション、（4）教職員・保護者を対象とした研究会や、他機関とのコーディネーション、（5）学校とコミュニティのニーズ調査および評価研究、の五つの骨子からなっている、という。

大学院専門コースでは、（1）スクールカウンセリングプログラムの歴史的ルーツや現在のニーズ、これからの傾向を把握し、（2）児童生徒の発達課題に応じた個別・集団カウンセリングの理論と技法を身につけており、（3）幼稚園から高校3年生までの心の教育（ガイダンス）ができ、プログラムを作成でき、（4）スクールカウンセリングを展開する上で必要な法律と倫理を身につけており、（5）保護者や学校職員、地域の連携機関へのコンサルテーションや（6）危機介入ができるカウンセラーを育てることを目的として、プロのスクールカウンセラーとして知っておかなければならない事項をまとめ、すぐに役に立つ実践的なプログラムを作成するという課題が出された、という。

そして、スクールカウンセリングプログラムの各項目としては、（1）システム情報、（2）職務説明、（3）ガイダンスプログラムの到達目標、（4）危機介入プラン、（5）ニーズ調査と評価、（6）関連法律と倫理綱領、（7）コミュニティ情報、（8）キャリアカウンセリング、（9）ガイダンス教材、（10）役立つ情報、（11）学校プロフィール作成、（12）参考図書・その他が挙げられた。

評価 (Poor) 1 . ② . 3 . 4 . 5 (Excellent)

文献番号：52

論文名：アメリカで学んだスクールカウンセリングの内容

第3回 スクールカウンセリングプログラムの内容

執筆者名：新福 知子

出典：月刊学校教育相談

刊行年：1999

巻：頁：13(8):68-72

KeyWord：職務説明／スクールカウンセリング

スクールカウンセリングプログラムの各項目について、筆者のインターン時代の経験を交えながら具体的に解説されている。

システム情報とは、スクールカウンセラーとして赴任する前に、その学校についての様々な情報（学校名や創立年から地域の社会経済的背景、カウンセラー以外の補助的人材など）を整理しておくものである。これによって、勤務開始と同時に、カウンセラー業務がスムーズに行えるようになる。特にカウンセラー以外の補助的な人材について知っておくことが有用であった、という。

職務説明とは、スクールカウンセラーとしての職務を様々な角度から定義づけるために、地区の教育委員会から出された、教育哲学、目標、任務に関する声明である。

評価 (Poor) ① ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 (Excellent)

文献番号：53

論文名：アメリカで学んだスクールカウンセリングの内容

第4回 危機介入プランの内容

執筆者名：新福 知子

出典：月刊学校教育相談

刊行年：1999

巻：頁：13(9):68-73

KeyWord：危機介入／自殺予防プログラム／スクールカウンセラー

危機介入は、スクールカウンセリングプログラムの最重要部分の一つであるとされている。危機について、「まだ危険はないが、それが起こりうるだろうと想定できる段階、もしくはすでに危険な状態にある場合」とであると定義され、授業中の問題行動や対教師暴力・生徒間暴力・体罰・器物破損、離婚・身近な人の死及び喪失や自然災害が例として挙げられた。そして、これらが起こってしまった場合に子どもや職員、保護者が受けるであろうダメージを最小限に抑え、早期に通常の生活に戻ることができるようにサポートしていくことを「危機介入」とした。

その例として、「十代の子どもの自殺予防プログラム」が紹介された。自殺は、「自殺思考」、「自殺強迫」、「自殺のそぶり」、「自殺企図ののち、一命をとりとめた状態」、「自殺完遂」の五段階に分けられる。第五段階に至る前にはワーニングサインがあるため、これを真剣に受け止めることが重用になる。

そして、危機介入の三つのステップが紹介された。予防、介入、事後介入である。予防のためには子どもとの日々の関わり方や危機に対する知識、早期の問題発見が重要となるが、危機を完全に防ぐことは不可能であるため、危機を正しく理解し、適切な対処法を知っておくことが必要となる。また、知識として知っているだけではなく、現場を想定したトレーニングを受けていなければならない。介入は、言語的介入と身体的介入から構成される。一方事後介入に関しては、日常的に起こりうる軽度の危機の場合には全ての教職員が介入法を知っておくべきであり、危機状況が深刻な場合にはスクールカウンセラーが中心となってかかわるべきである。さらに、より被害が大きい場合には、より大規模な援助が必要となる。

どのような危機的状況においても、その場面を客観的に捉え、効果的な介入法を使い分けることが大切である。

評価 (Poor) ① ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 (Excellent)

文献番号：54

論文名：アメリカで学んだスクールカウンセリングの内容

第5回 自殺に対する対応

執筆者名：新福 知子

出典：月刊学校教育相談

刊行年：1999

巻：頁：13(10):108-113

Keyword：自殺／危機介入／自殺予防

日本における自殺者の中に多数の児童生徒が含まれているであろうことを受けて、アメリカにおける自殺への対応法を紹介した。

ここでは、アメリカの自殺の傾向が述べられ、ワーニングサイン（予兆）を見つけることがカギであるとされた。特に、自殺を考える子どもの多くが自殺強迫をすることが確認された。そして、ワーニングサインへの対応法として、第一に、そうしたサインを軽視せず、冷静にそのメッセージを受け止め、「助けてあげたいと思っている」という気持ちを込めて接するべきであることが述べられた。第二に、自殺が実行される可能性をアセスメントすることの大切さが述べられた。

最後に、すべきこと、してはならないことがまとめて挙げられた。すべきことは、ワーニングサインを見逃さないこと、保護者に連絡をとること、子どもの言語的・非言語的メッセージから感情を読み取ること、危機介入チームに連絡することであり、してはならないことは、無理に守秘義務を守ろうとすること、説教や説得をすること、自発を挑発すること、その子を一人にすること、一人で助けようとする、ワーニングサインを無視・軽視すること、である。

評価 (Poor) ① ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 (Excellent)

文献番号：55

論文名：アメリカで学んだスクールカウンセリングの内容

第6回 危機後介入のプラン

執筆者名：新福 知子

出典：月刊学校教育相談

刊行年：1999

巻：頁：13(11):66-74

Keyword：危機後介入／危機対応チーム／危機介入プラン

まず、危機後介入の重要性と対応の多様性について述べられた。危機後介入は、危機を再発のチャンスとするため、大切である。危機の深刻度によって対応が異なり、学校内のみの対応で済むものもあれば、地区のスクールカウンセラーによる危機対応チームに援助を呼びかける必要があるもの、国全体に影響を与えるような事態で、地域の医師や心理学者たちが援助をする場合などがある。

次に、筆者の体験が語られた。筆者は、アラバマ州のハンツビル地区のスクールカウンセラーたちが考案・開発した学校危機マネジメントブックを参照にした授業で学んだ。これは、地域の様々な人々の賛同を得た上で配布されていた。

危機介入プランは毎年再検討され、必要に応じて改訂されなくてはならない。この作業は新年度が始まる前までに終了し、前教職員が改訂後の新しい危機介入プランを理解し、危機発生後にどの部分の責任者として行動すべきかを把握しておくことが必要となる。また、この時点が危機介入チームを編成しておくことも重要である。こうした準備を十分に行い、危機後の迅速な対応を可能にしておくべきである。また、チームのメンバーには、スクールカウンセラーの他、管理職、教職員、養護教諭、警備員または地域の警察が含まれることが望ましい。また、これらのメンバーは、子どもたちとのラポールが取れていて、柔軟に対応できる能力があり、ストレス耐性の高い人が望ましい。

そして、事例に基づいて提案がなされた。それらはいずれも、事前に綿密な危機介入プランを立てていたことが奏効した事例だった。危機後介入における前準備の重要性が述べられた。

評価 (Poor) 1 . ② . 3 . 4 . 5 (Excellent)

文献番号：56

論文名：アメリカで学んだスクールカウンセリングの内容 第7回 ガイダンスとは何か

執筆者名：新福 知子

出典：月刊学校教育相談

刊行年：1999

巻：頁：13(12):68-73

Keyword：ガイダンスプログラム／予防的介入

アメリカにおける包括的・開発的ガイダンスプログラムについて記されている。ガイダンスとは子どもたちが生きていく上で役に立つ知識やスキルを教えることであり、それを教えることがガイダンス授業である。その目的は、子どもたちが現在そして将来において充実した社会生活を送ることができるように方向付けし、支援することにある。

その基本となる考え方は、情緒・社会面での発達、学業での発展、キャリア能力の開発である。したがって、ガイダンス授業では、生きていく上での力の源となる知識と、そのために必須のスキルを教えることに焦点が当てられている。これによって子どもは、あらゆる場面における問題処理能力を身につけられるようになる。

ガイダンスは、あらゆる問題を発生を未然に防ぐことに焦点を当てた介入であるため、スクールカウンセラーの大切な職務の一つであり、また、予防的な介入を行う上で絶好の機会でもある。

評価 (Poor) 1 . 2 . 3 . ④ . 5 (Excellent)

文献番号：57

論文名：アメリカで学んだスクールカウンセリングの内容

第8回 ガイダンスプログラムの条件

執筆者名：新福 知子

出典：月刊学校教育相談

刊行年：1999

巻：頁：13(13):68-73

Keyword：ガイダンスプログラム／予防

将来日本において表面化、あるいはさらに深刻化するであろうと懸念される多くの問題がある。学級崩壊や家庭崩壊、校内暴力、家庭内暴力、薬物・アルコール依存、子どもの人権問題は、アメリカではすでに問題になっており、それに大して具体的な対応策が様々生み出され、効果を挙げている。その一つにガイダンスプログラムがある。これは、現在および将来における様々な社会問題の予防や抑止につながると思われる。

ガイダンスプログラムは、幼稚園生、小学生、中学生、高校生の各学年単位において、その習得すべき目標やガイドラインを定めたものである。情緒や社会面での発達目標、学業での到達目標、職業能力の開発と目標の三側面から構成されている。それぞれの側面ごとに、到達すべき目標が定められている。これを踏まえて、筆者は小学校三年生に対して、勉強する環境や時間管理の大切さ、授業を聞くことの大切さについてガイダンス授業を行った例を紹介している。また、アリゾナ州において、複数のスクールカウンセラーがチームを組み、ガイダンスプログラムを組み立て、クリエイティブで効果的なものを作り上げている例をあげている。

そして、ガイダンスプログラムがあらゆる社会問題の予防につながるとし、総合学習の時間にこれを導入していくことで、教育現場を取り巻く諸問題を防止・予防していくことが可能となるだろうと述べている。

評価 (Poor) 1 . 2 . 3 . ④ . 5 (Excellent)

文献番号：58

論文名： 'Someone to Talk to Who'll Listen':Addressing the Psychosocial Needs of Children and Families

執筆者名：Stiring A, J et al

出典：Journal of Community&Applied Social Psychology

刊行年：2001

巻：頁：11:179-191

KeyWord：child mental halth/community seVICES/psychosocial health

本論文では、イギリスにおける、コミュニティに基づいた介入 (community-based intervention) の立場にたち、子どもや、青年、両親、家族に心理社会的援助 (psychosocial help) を行うサービスである「the Lewisham Community Child and Family Service (LCCFS)」を紹介している。このサービスは、心身共に健康である為の早期介入、予防、改善に焦点を当てている。これは、エージェントとしての機能を果たしているのと同時に、地域と個人とのパートナーシップに基づいたカウンセリングモデルであり、理論的背景としては、Kelly, G.Hのいうパーソナル・コンストラクト理論にのっっているとしている。LCCFSは、現代求められているコミュニティ・メンタルヘルスに応じたサービスといえる。

評価 (Poor) 1 . 2 . ③ . 4 . 5 (Excellent)

文献番号：59

論文名：Mediation in a Family-Directed Program for Prevention of Adolescent Tobacco and Alcohol Use

執筆者名：
T. Ennett, Ph. D. et al

出典：Preventive
Medicine

刊行年：2001

巻：頁：33:333-346

Keyword：Family matters / Adolescence / tobacco / alcohol / family / drug use prevention

本研究では、Family mattersという、煙草とアルコール服用を家族ぐるみで、かつ家族におけるリスクファクターに焦点を絞ることによって、青少年(12歳～14歳)がその服用を予防する試みとしてデザインされた広く行われている予防的介入である。このプログラムは、家族に4つの冊子を送ることから始まる。両親はこの冊子を読み、質問→答え形式でかかかれているものに答えていき、家庭の中でアクティビティを行う(具体的な冊子の内容は、インターネット上で公開されている。

<http://www.sph.umu.edu/familymatters>) この介入プログラムのメリットは、専門家等の介入なしに冊子を読むことで家庭で出来ることにある。この論文では、このプログラムについての効果研究を行っている、このプログラムに参加する人の中から無作為抽出しに12歳～14歳の子ども1014人の子どもとその親に対して、開始時・3ヶ月・12ヶ月(プログラム完了後)で電話を通して行動面の変化の聞き取り調査を行い、統計的に分析したところ(ロジスティック回帰分析)、家族で話あって家庭内における煙草・アルコール服用に関してのルールを決めるといったような、このプログラムモデルが焦点を当てている、3つの領域の一つの現実的な家族役割(Substance-specific Family Characteristics) 領域で行われること(詳細は本文参照のこと) が統計的に有意であったが、プログラムと子どもとの仲介者としての役割である家族が行うこと自体の効果は得られなかった。

評価 (Poor) 1 . 2 . 3 . ④ . 5 (Excellent)

文献番号：60

論文名：思春期 思春期保健福祉学習（増刊 新しい時代の小児保健活動—
—4. 小児保健のトピック）

執筆者名：田中義人

出典：小児科臨床

刊行年：2000

巻：頁：53(増刊)：1237-1240

Keyword：思春期，赤ちゃんふれあい体験学習

少子高齢化の中で，乳幼児にふれたことのない中学・高校生が増加している。赤ちゃんに全くふれたことがないまま結婚し，親となる人も少なくない。このことが，現代の子育てをめぐる様々な問題の原因の一つとも考えられている。文部省でもこの点を憂慮し，数年前から「生きる力」を育むために学校・家庭・地域社会の連携をはかり，開かれた学校づくりを促進すること，総合的な学習や特別活動を通じてボランティア活動や体験学習を推進することなどを提言しはじめた。本論文は，こういった情勢の中，広島市で行われた中学生を対象とした「赤ちゃんふれあい体験学習」による成果報告の一環で書かれたものである。

「赤ちゃんふれあい」前と後で「赤ちゃんについて」感想文を書かせたものの語句の変化（肯定的な表現，否定的な表現等）を検討したところ，全体の89.3%（359名）が，感想文を見る限り肯定的な評価をしている。

今後の課題としては，否定的な評価をした19.7%（43名）を今後どのように指導していけばよいのかが課題とされている。

評価 (Poor) 1 . ② . 3 . 4 . 5 (Excellent)

文献番号：61

論文名：REFLECTINS ON IMPLEMENTING A COMMUNITY AGENCY-SCHOOL PREVENTION PROGRAM

執筆者名：Tena L.St.Pierre
and D.Lynne Kaltreider

出典：Journal of
Community Psychology

刊行年：2001

巻：頁：29(2):107-116

Keyword：BOYS&GIRLS CLUBS/MULTICOMPONENT SUBSTANCE ABUSE PREVENTION PROGRAM

本研究は、ボーイズ&ガールズクラブや地域の学校の協力のもとに、長期的に行われた物質乱用をする危険の高い2、3年生への放課後に行われる多重構成予防プログラムの成果報告である(参照、抄録番号62)。論文の構成としてプログラム実行におけるそのプロセスから得られた知見を述べている。

結果は、個人における効力感に関するスキルや、学校に対する感情、単語つづりの得点、将来物質乱用やその他の危険な行動から子どもを守ると思われる要因において、ポジティブなものであった。ボーイズ&ガールズクラブと学校との連携のプロセスにおいて大事なことは、1)「真」の関係性を作り、2)学校や教師が本当に必要としているものを供給するということ。またプログラム実行に際して、1)予防のコーディネーターが入念な訓練を積んだ者で、2)統合的・組織的なサポート体制を作ること、プログラムが円滑に実行される、ということ強調している。

評価 (Poor) 1 . 2 . 3 . ④ . 5 (Excellent)

文献番号：62

論文名：BOYS&GIRLS CLUBS AND SCHOOL COLLABORATIONS:A LONGITUDINAL STUDY OF A MULTICOMPONENT SUBSTANCE ABUSE PREVENTION PROGRAM FOR HIGH-RISK EREMENTARY SCHOOL CHILDLEN

執筆者名：

Tena.L.St.Pierre et al

出典：Journal

community psychology

刊行年：2001

巻：頁：29(2)87-106

KeyWord：BOYS&GIRLS CLUBS/MULTICOMPONENT SUBSTANCE ABUSE PREVENTION PROGRAM

本論文は、BOYS&GIRLS CLUBS（日本でいう学童保育所のような場所で、6歳から18歳までの子供達を対象に、放課後や長期休み期間中に遊んだり学んだり出来る場所を提供する所）とその機関が所属する地元の小学校との連携により行われたMULTICOMPONENT SUBSTANCE ABUSE PREVENTION PROGRAMの報告書である。対象は、2年生、3年生を対象とし、物質乱用（薬、タバコ、酒などの嗜好品）の早期予防を目的として行われたものである。プログラム期間は二年間に渡り、その間に子どもには、放課後3時間の機関での活動、学校からは、一週間の内月曜から木曜までなんらかの宿題が課され、また週に一時間だけ、地域住民や協力した学校の教師などがボランティアとして家庭教師の役を担って、勉強を教えた。参加した子どもの親に対しては、専門のコーディネーターにより5回のセッションが図られ、1回目は、日常について、2回目は、宿題を課せられた子どもを助けること等々、学校とその機関、親御さんの連携がきちんと取れるよう組織化するよう教示された。また学校に対してはも、コーディネーターが学校と親御さんとのカンファレンスを頻繁に開けるようコーディネートしたり、機関とが協働できるように努めた。

質問紙等を用い、統制群と、その心理的、行動的効果について分析したところ以下の結果がでている。1) 間違っただ行いを回避するようになった、2) 友達や学校の問題を解決する力がついた、3) 教師と学校職員との連携、4) 倫理的な振る舞いがとれるようになったなどである。結論としては、BOYS&GIRLS CLUBSのような外部機関と学校の協働により、将来的、物質乱用におけるリスクファクターに代わる抵抗力がついたものと解釈された。

評価 (Poor) 1 . 2 . 3 . ④ . 5 (Excellent)

文献番号：63

論文名：GOING FOR THE GOAL:IMPROVING YOUTHS' S PROBLEM-SOLVING SKILLS THROUGH A SCHOOL-BASED INTERVENTION

執筆者名：Todd
C. O'Heam

出典：Journal of
Community Psychology

刊行年：2002

巻：頁：30(4):367-388

Keyword：

本研究は、都市部の思春期にあるハイリスクな子どもたちに対して行われた学校を基にした介入 (School-Based intervention) の介入・予防プログラムであるDanish(1992) が作成した「GOING FOR THE GOAL(GOAL)」の効果を評価するために行われたものである。「GOAL」は10週のワークショップからなっており、心理教育(psycho-education)によりライフスキル(life-skills)の獲得目的とする。ワークショップのリーダーとして高校生(あらかじめ学校の教師やカウンセラーに選抜された生徒で、選抜後ピアカウンセラーとしてのトレーニングを2日間積んでいる)と中学生からなる。ワークショップは1回毎に1つのテーマに沿ってセッティングされる。1) 生徒(中学生)に夢を持つことを奨励, 2) 夢に関連したゴールを設定する, 3) そのゴールを実行可能な設定になるよう, また本人が望むようリーダーがアシストする。(例えば, 1) 夢として「医者」になることを希望したとしたら「ゴール」としては, 学校での生物の選抜クラスでAクラスになること), 4) 設定したゴールにたどり着くための梯子となるものをいくつかリーダーが紹介する, 5) ゴールにたどり着く上での障害について話し合う, 6) 問題を解決する方法を与える(この方法は, STARと呼ばれる基準で提供される, S=Stop～.「一度落ち着いて考えよう」, T=think～.「障害を解決できるものをいくつか考えよう」, A=Anticipate～.「その選択肢を選ぶことで生じる結果を考えよう」, R=Respond～.「最も妥当な選択を選ぼう」), 7) 他者に助けを求めることの重要性を教える, 8) 障害にぶつかったとき, 動じないようにする, 9) 生徒自身が自分の長所を自覚し, かつ達成感が得られるように手をさしのべる, 10) これまでのセッションでやってきたことのまとめ。

と以上のような構成になっているが, 本研究では, 46名の高校生リーダーと479名の中学生にこのプログラムを実施した。セッション終了後心理テストを行ったところ, 中学生は, 教えられたスキルの獲得, 問題解決スキルが発達が見られ, リーダーの役目をした高校生にもライフスキルの発達が見られた。このアプローチは, ヘルパーとしての役割を担いながら利益をうる機会を高校生リーダーに与える一方, コミュニティ資源としての質と生態学的妥当性を持ったものとして評価ができる。

評価 (Poor) 1 . 2 . 3 . ④ . 5 (Excellent)

文献番号：64

論文名：思春期 非行（増刊 新しい時代の小児保健活動——4. 小児保健のトピック）

執筆者名：坪井節子

出典：小児科臨床

刊行年：2000

巻：頁：53(増刊):1261-1264

Keyword：傷だらけの子どもたち／SOSとしての非行／尊厳の回復／罪の自覚と更正の決意

非行少年と呼ばれる少年少女の被疑者弁護人や、付添人として、犯罪を犯したとして保護され、取調べを受け、家庭裁判所に送られて審判をうける子どもに携わる仕事に取り組んでいる著者自身の、いくつかの少年事件の事例を取り上げ、その中から非行少年の自尊心が育つともいえる人権回復を訴え、同時に非行予防の為の理念となる「大人と子どもの対等なパートナーとして生きる」社会を目指し、書かれた論文である。

評価 (Poor) ① · 2 · 3 · 4 · 5 (Excellent)

文献番号 : 65

論文名 : Using a psychoeducational approach to increase the self-esteem of adolescents at high-risk for dropping out

執筆者名 : Wells, Don et al

出典 : Adolescence

刊行年 : 2002

巻 ; 頁 : 37 (146) ; 431-434

Keyword : Potential Dropouts / Psychoeducation / Psychotherapeutic Counseling / Self esteem / At risk Population / Treatment Outcomes

ドロップアウトの危険の高い思春期青年80名の自己概念を変える上で、生態学的アプローチの効果が検証された。参加者（14歳～16歳の男女）は、ドロップアウトを防止するためにデザインされた8週間の心理教育的なプログラムの前後で、自尊感情の尺度を行った。その結果は、参加者のドロップアウト率を有意に低下させ、自尊感情を有意に高めた。

評価 (Poor) 1 . 2 . 3 . ④ . 5 (Excellent)

文献番号：66

論文名：Pathways to the self:A psychoeducational program for female adolescent identity development Whiting,Cristin Carr

執筆者名：Whiting, Cristin Carr

出典： : Dissertation Abstracts International:Section B:The Sciences & Engineering

刊行年：2000

巻：頁：61（3-B）；1660

Keyword：Adolescent Development/Gender Identity/Self concept/Psychoeducation/Social Identity/Human Females

これはパスウェイと呼ばれる心理教育的なプログラムのマニュアルである。パスウェイは、14歳から17歳までの思春期女子のジェンダーや性的、文化的アイデンティティの確立を目指すという立場から、彼女たちのアイデンティティの発達を援助するものである。パスウェイのプログラムは、三つの目的を持っている。第一の目的は、はっきりした自分自身が認められるアイデンティティの発達を参加者にうながすことである。第二の目的は、参加者が将来のための幅広い選択肢を見つけられるようにすることである。第三の目的は、参加者が自分についての確信を持てるようにすることである。そのマニュアルは、22回から24回の活動プログラムを詳細に述べている。それは主となる三つの領域に焦点を当てたカリキュラムを含めて作られている。最初の領域では、認知やメディアのシステムとして、過去に受けた、あるいは現在受けている影響が、自分のアイデンティティをどのように作り上げているかを参加者に教える。第二の領域では、ポジティブなアイデンティティを確立するために有害な効果をもたらす、圧迫されるような過去の影響から抜け出すためのコーピング方略を参加者に伝達する。最後の領域では、参加者が自分のセクシャリティに関連する感情や価値観をはっきりさせ、一貫した様式でふるまう能力を高めるという援助をする。それは、プログラムの方式や、セッションを構成する前述した方法の理論的な根拠を記述している。また、プログラム受けるのに相応しい参加者のタイプや、潜在的な参加者をスクリーニングする方法、参加者や彼女たちの両親にインフォームド・コンセントを与える手続きも記述されている。どのようにプログラムを行うかについての推薦や、プログラムを行う可能性のある場所についての考察も述べられている。加えて、プログラムの効果を評価する手続きも述べられている。この手続きは、独自にデザインされた尺度と目的のために創造され、あるいは収集された、以前からあるスタンダードな尺度の両方を使用し、得点化する技法をもっている。さらに、児童虐待の疑いを報告する必要があるというような、プログラムを行っている間に起こるかもしれないと予想されるシナリオも特定され、その解決のための提案も述べられている。最後に、グループのファシリテーターと参加者の両方が関連する資源のリストが掲載されている。

評価 (Poor) 1 . 2 . 3 . 4 . ⑤ (Excellent)

文献番号：67

書籍名：危機介入とコンサルテーション

執筆者名：山本和郎

出版社：ミネルヴァ書房

刊行年：2000

巻：頁：1-117

Keyword：コミュニティアプローチの発想／危機介入／伝統的心理療法／コミュニティ心理学的心理臨床

本書籍は、の学校で、職場・家庭・地域等々で心理的困難な問題に直面している相談者に、出来る限り短期間にその問題を解決できるように助言する心理相談・危機介入法・コンサルテーション法を示している書籍である。コミュニティ心理学の基本的な考え方を示した概論書ともいえるだろう。本全体の構成としては以下のようになっている。

目次：

- 1 コミュニティ心理学的アプローチの発想
 - ・コミュニティ心理学とは何か
 - ・コミュニティ心理学はなぜ「コミュニティ」心理学なのか
 - ・コミュニティ心理学的発想の基本的特徴等全7節)
- 2 危機介入
 - ・危機介入とは
 - ・危機理論
 - ・事例—夫婦の危機 男のハイジャンプ 等全9節)
- 3 コンサルテーション
 - ・コンサルテーションの意義
 - ・コンサルテーションの概念規定と基本特性
 - ・コンサルテーションの種類 R等全8節)

評価 (Poor) 1 . 2 . 3 . 4 . ⑤ (Excellent)

ホームページを使ったライフスキル教育

特定非営利活動法人アスク（アルコール薬物問題全国市民協会）

代表 今成 知美

1. はじめに

特定非営利活動法人アスクでは、社会福祉医療事業団（子育て支援基金）の助成を受けて、2002年にアルコール・薬物・タバコの予防教育のホームページ「アスク・キッズ www.ask.or.jp/kids」を制作。続く2003年3月に「自分らしく生きるための道具箱 www.ask.or.jp/lifeskill」を制作した。「アスク・キッズ」はゲームを通して予防知識を身につけることが目的だったが、「自分らしく生きるための道具箱」は思春期のライフスキル育成がテーマである。

ライフスキルとは、ひとことで訳せば「生き方の技術」。子どもたちの飲酒・喫煙・薬物乱用は、予防知識を与えるだけでは防げない。自分を大切に感じられる「セルフエスティーム（自己信頼）」の育成や、同年代の仲間の圧力（ピアプレッシャー）に対抗できるだけの「コミュニケーション能力」の開発など、ライフスキル教育が必要になる。思春期にさまざまなライフスキルを身につけることは、自立を促し、いじめや暴力・非行・早すぎる妊娠の抑止にもつながる。ライフスキルは、健康な人生を選択するための基礎となるのである。

「自分らしく生きるための道具箱」は、中学生を中心に小学校高学年から高校までの子どもたちを主な対象としている。メインページはアニメで、ドッカン(攻撃型)・オロロ(受身型)・ネッチー(作為型)という3人のキャラクターを登場させた。

ブロードバンド時代といいながら、楽しんで学べる子ども向けサイトは少ない。一方、練習に

よってライフスキルを身につけるという考え方も、日本ではまだ馴染みがない。今回の事業は、「ライフスキルを楽しく学習できるホームページをつくらう」ということで、私たちにとって二重の意味で大きな挑戦だった。インターネットという情報発信メディアを用いて、どんな工夫をすれば、何が伝えられるか。今回も制作過程で予期しない課題にぶつかったが、熱意あふれる外部委託者と監修者、モニターの協力を得て、子どもばかりか大人にも十分参考になるページになったと自負している。

本論文では、「自分らしく生きるための道具箱」制作のプロセスを振り返りながら、ホームページを使ったライフスキル教育の可能性について考えてみたい。

2. なぜライフスキル教育が必要だと考えたのか？

アスクはアルコール依存症者の家族や援助者が中心になって設立した団体で、アルコール・薬物依存症の予防・早期発見・回復（再発予防）に取り組んできた。アルコールや薬物に依存した経験をもつ若者たちが回復過程でぶつかるのが、ライフスキル上の課題である。回復の中でライフスキルを身につけていかないと、対人関係が苦手、自分の感情が表現できない、いやなのに断われない、自分を好きになれない……という苦しい状況に押しつぶされ、「いつの間にか、アルコールや薬物でストレスを逃す以前の生活に戻っていた」ということが起きてくる。ライフスキルはまた、親の

依存症などの問題を抱えた家庭で育ったAC（アダルトチャイルド）にとっても、生きづらさから抜けるためのキーワードとなりうる。ACが親から引き継いだ不健康な生き方のパターンは依存症やバーンアウトなどを生み出す土壌となり、それを防ぐためには健康的なライフスキルを身につける必要があるからである。こうやって考えていくと、依存症者やACでなくても、健康な人生を選択するとき、ライフスキルが大きな役割を果たすことがわかる。ストレス対処の方法をいろいろと身につけていれば、飲酒で憂さを晴らさなくてもすむだろうし、感情をためずに表現でき、言いたいことがきちんと伝えられるだけで、ストレスそのものが大幅に軽減するだろう。

ライフスキルの習得は回復にも予防にも必要という確信を持ち、アスクでは、大人のライフスキル・プログラムとして、1994年に「アサーティブ・トレーニング」の講座を開講した。アサーティブ・トレーニングは1970年代のアメリカで始まり、自己信頼の上に立った対等な人間関係、率直で誠実なコミュニケーションを体得するプログラムとして高く評価されている。（アサーティブ・トレーニングについては別項で説明）

その一方アスクでは、1990年に中学・高校へのアルコール予防教育の出張講座を開始しており、アメリカ、オーストラリアの予防教育を視察する中で、ライフスキル教育の存在を知った。例えばマサチューセッツ州カーライル校では、「低学年のうちからセルフエスティームを育てることができれば、思春期に達してアルコールや薬物に接したときに、適切な意思決定ができる」という思想で、幼稚園から高校まで、週30分のヘルス・カリキュラムを行っていた。ロールプレイや小グループ・ディスカッション・ビデオ・プロジェクトを通して感情表現・対人関係・怒りや非難への対処・励ましあい・責任ある行動などを学ぶのである。オーストラリアの非営利団体ライフ・エデュケーションでは講師が出張する形で、幼稚園から高校までの薬物予防教育を行なっているが、その中にも、セルフエスティーム、ピアブ

レッシャーへの対抗などのライフスキル教育が含まれている。つまり、正しい予防知識を与えることはもちろん大切だが、自分を大切に感じることができなければ自己破壊的な行動をとってしまうし、知識とセルフエスティームの両方があったとしても、ピアプレッシャーに対抗する術を持たないと、周りに流されて、自己決定ができないということが起きてしまうからである。試行錯誤を経て、現在、小・中・高向けのアスクの予防教育出張講座には、感情対処やピアプレッシャーへの対抗などのライフスキルを組み入れている。

「思春期向けのライフスキルのサイトを作ろう」という発想は、このような活動の中から生まれたのである。

3. ライフスキルにはどんなものがあるか？

WHO（世界保健機関）では、ライフスキルを「日常のさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な（社会心理学的な）能力」と定義して、次の10項目をあげている。

- 意志決定 ●問題解決 ●創造的思考 ●批判的思考 ●効果的コミュニケーション
- 対人関係 ●自己意識 ●共感性 ●情動への対処 ●ストレスへの対処

アメリカで開発された子ども向けの健康教育プログラム「KYB (Know Your Body)」では、以下の5項目をあげている。

- セルフエスティーム（自己信頼）の形成 ●目標設定 ●意思決定 ●ストレス・マネジメント ●コミュニケーション

ライオンズ・クラブが推進している15～18歳までの健康教育プログラム「ライオンズ・クエスト」では次のようになっている。

- 自己責任 ●コミュニケーション ●目標設定 ●意思決定 ●飲酒薬物使用をすすめるピアプレッシャーへの対抗 ●対立場面への対処、など